

土を踏み、風に祈る

『四国八十八ヶ所

ヘンロ小屋プロジェクト』で

遍路文化の継承と広がりを願う

建築家 歌一洋さん



弘法大師の足跡を辿り、八十八カ所の霊場を巡拝するお遍路さん。平成26年に霊場開創1200年を迎え、若い女性を中心にパワースポットとしても人気が出ている。

近年は遍路道1400kmをバスなどで回るツアーが増え、その目的も健康長寿、開運、縁結びなど人それぞれ。お遍路さんの装束も普段着のままの人もいれば、脚絆を付けた白装束姿もいる。その多くが持っているのが菅笠と金剛杖。笠には「同行二人」と書かれているが、「二人」とはひとり自分、もう1人は弘法大師の意。弘法大師様と一緒に巡礼の道を行くお遍路さんたち。最近では外国人や若者の歩き遍路も目立つようになってきている。

海部で生まれ育った建築家の歌一洋さんは、子どもの頃にお遍路さんが拝む姿やお接待をしていた人たちの様子を鮮明に覚えている。

「小さい頃からお遍路さんはすごく身近だね。お遍路さんが家の門の前で拜んで行きましたから。うちは普通の民家だし、

遍路道から2キロも外れた場所にあったけど、うちに限らず、あちこちの家の前でお遍路さんが寄って拜んでいくんです。それを見かけると、母親や祖母が門まで出て行ってお米を袋に入れてあげたり食べ物を振る舞ったり。私も子どもの頃から同じようにしていました。お遍路さんはそうやって托鉢的に回ってました」

かつてのお遍路さんは、現在とは少し趣きを異にしていた。しかし、どんな事情で八十八カ所を巡っているにしても、徳島を始め四国には昔からお遍路さんを見かけると食べ物やお茶で遍路道の疲れを癒してもらおうと声をかける人たちがいる。いわゆる「お接待」。

お遍路の経験者はみな一様にお接待のぬくもりとありがたさを口にする。

そんな無償の行為がひとつの文化として残る遍路道に、お遍路さんたちがちよつと休憩して脚を休めたり、見知らぬお遍路さん同士が会話したり、仮眠できるような場所があれば